

## 近代の群馬県桐生地方の産業化と修養主義 —ある企業経営者の軌跡—

坂根 治美

Osami Sakane: Industrialization and Shuyoshugi in Kiryu, Gunma prefecture in the modern age :  
A case study on a local entrepreneur. Bulletin of Sendai University, 45 (2) : 69-80, March, 2014.

**Abstract:** Junichiro Maehara, a representative modern entrepreneur in Kiryu, advocated the importance of Shuyo (cultivation of mind) even when he was a college student. As an executive director of a company, he was eagerly engaged in the company education based on Shuyoshugi and introduced the activity of Shuyodan (a representative organization of Shuyoshugi) into his company. It is conceivable that his life course (including the high reputation of his own character) and the development of his company showed the effectiveness of his pragmatic Shuyoshugi in his life.

**Key words:** Junichiro Maehara, life course, Shuyodan  
キーワード: 前原準一郎, ライフコース, 修養団

### I. はじめに

明治 39 年創立の修養団 50 周年の際、群馬県桐生市の前原準一郎は記念表彰を受けている。群馬県内で表彰を受けたのは前原を含めて 4 名のみである<sup>1)</sup>。

前原準一郎は明治 12 年 5 月に桐生新町に生まれ、明治 35 年東京高等工業学校機織科卒業後さらに専攻科生として機械科に学び、明治 38 年に群馬県立桐生織物学校教諭、明治 39 年に合資会社桐生製作所（のちの桐生機械株式会社。以下、場合によっては「桐生機械」と略記）の代表社員となる人物であるが、彼は近代の桐生を代表する三つの企業（以下「三企業」と略記）の一つと称されるこの会社<sup>2)</sup>の経営者としての人生を歩む過程において、修養団活動にも積極的に関与している。

明治 39 年に蓮沼門三が創設した修養団の目

的が「①自己の修養につとめ、人格の向上をはかり、②相呼応して精神的教育を行い、③教育界を革正し、現社会を改善する」<sup>3)</sup>ことであったという点にみられるように、近代日本の修養主義は基本的には人格主義であったといわれている<sup>4)</sup>。

19 世紀から 20 世紀への転換期に登場してきた修養主義運動のわが国の産業化の過程における意味の解明に向けての作業の一つとして、本論文では前原準一郎のライフコースに注目し、彼の修養団との関わりと彼の修養主義の特徴および彼が桐生地方ではたした役割について検討してみたい<sup>5)</sup>。

### II. 東京高等工業学校在学中の問題提起

前原準一郎は東京高等工業学校（以下、「東京高工」と略記）在学中の明治 34 年に地方誌『桐

生之工業』に論説「桐生の織物工業振興策に就て」を寄稿している<sup>6)</sup>。

この論説で前原が第一にとりあげているのが機業者の道德の問題であるが、それは次のようなことをきっかけとしている。

桐生へ行って歸つて來る人に遇ふと、桐生は風俗がよくないとか、人氣が悪いとか云ふ、始めの中は切に辨解して見たが、度々云はれるので段々考へて見ると、人の云ふ程ではないにしても確によくはないと云ふことが解つた<sup>7)</sup>

そして、彼は道德の重要性を指摘しながら桐生地方における状況を次のように批判している。

(前略) 凡そ人間には其いかなる時代いかなる境遇にあるにせよ、道德が最必要であつて、明に自己の義務を悟り、確な自信を以て事を爲さなければ、何でも充分には行くまいと思ふ、殊に工業家は無教育なる多人數の職工を使役するのであるから、此点に就ては最深く注意する必要がある、監理者が餘程苦心しても職工の不道惡習に陥り易いのであるのに、桐生地方の織物業者はこんなことには全く無頓着であり、地方の有志とか云はる、人々も、軍人官吏の送迎、祭典には熱心に盡力するが、道德上の問題に注意する者はない様である、尚有体にいへば機業家自身が不道不義をなし、惡習を職工に示すのではあるまいか<sup>8)</sup>

こうした問題点を指摘した前原は、その解決策として次のように述べている。

同じ原料を用ひても其製品に甚しき優劣あるは、只職工の手先の巧拙ばかりでなく、彼等の意志の如何も非常なる影響をなすことである、故に我桐生の織物工業の進歩發達を望まば、直接間接に之に従事する人は、先づ第一に根本的に浮華輕佻の風習を脱し、技術に關する智識の發達を計ると共に、意志の修養

を勉め、職工を監理するにも此心を以てしなければならぬ<sup>9)</sup>

こうした対応が次のように具体的な問題の解決につながると主張するのである。

(前略) 技術者或は監理者が、技術以外に職工の道德に注意し、且自らも身を修めて好例を示したなら、遂には數多き職工の間に良習慣を作り、引ては我國民一般の德育の助にもなるに違ない、例へば吾人に缺けて居る時間場所に、就ての約束規律を守る習慣を養ふことは、上にいつた法で容易に成功すると思ふ<sup>10)</sup>

こうして織物の製造元に関する問題点を指摘したうえで、前原は仲買人の惡風をも具体的に列挙して彼らに対する倫理の教育の必要性を呼びかけながら、諸原料販売業者に関しても同様の指摘をしている<sup>11)</sup>。さらには桐生の夏祭りにおける人々の振る舞いをもとりあげて、「土地の紳士たる人が風姿舉動も、他地方の人が見たら、正氣の人のすることとは思ふまい」<sup>12)</sup>と極めて厳しく指弾しているのである。

ところで、前原準一郎がこの論説を寄稿した地方誌『桐生之工業』は、桐生織物学校教員である金子竹太郎、岩下龍太郎、前原悠一郎の3人を中心メンバーとする結社「桐生社」によって発行されていた雑誌であるが、桐生地方の有力者を会員とする「桐生懇和会」に金子竹太郎(明治33年12月入会)に加えて桐生社のもう一人の中心人物の前原悠一郎が入会(明治34年4月)すると同時にこの雑誌は桐生懇和会の機関誌的役割をも担うことになる。つまり、『桐生之工業』第32号(明治34年5月15日発行)から桐生懇和会の定例会の議事録、開催案内などが掲載され、同会の全会員に配布されることになるのである<sup>13)</sup>。森宗作、大澤福太郎、書上文左衛門という当時の桐生の3人の最有力者を筆頭とする桐生の有力者達とその配布先になった訳である。そうした雑誌に若い東京高工生徒という立場でありながらこうした率直な意見を寄稿することは、桐生出身者である前原準一郎

にとっては非常に大胆な行動であるといつてよく、それだけ彼がこの問題を深く憂慮していたことを示していると考えられる。

東京高工在学中に郷里桐生の抱える問題についてこのような大胆な提言をした当時の前原については、のちに次のような論評が別の地方雑誌に掲載されることになるのである。

氏は笈を東都に負ひ斯業の研究に耽るのとき夙に篤學の定評を受けたが其當時は既に一介の秀才たるに止まらず實力手腕ある事業家の素質を示したのである（後略）<sup>14)</sup>

### Ⅲ. 影響を受けた人物

前原準一郎の人生に大きな影響を与えた人物のうちまず挙げなくてはならないのが、彼の東京高工在籍中の校長の手島精一である。

明治39年創設の修養団において渋沢栄一、森村市左衛門とともに「草創期の功労者」と位置づけられている手島精一<sup>15)</sup>について、前原は人生において感謝すべきこととして次のように語っている。

家業たりし織物製造業を承継ぎ、其の發展を志して東京工業學校に入學（中略 明治三十四年五月に校名は東京高等工業學校と改稱さる）、機織分科に學びましたが、故手島校長の特別な御勧めにより、卒業後専攻科生となり機械科で學び、之れによりて身を立てるに至りましたこと<sup>16)</sup>。

前原にとっての手島は校長と一生徒の一般的な関係を超えた存在であったことが推察されるが、そのことは桐生機械創立満三十周年記念式の式辞の中の次のような部分にも表れている。

（前略）不肖が今日の事業を營むに至りましたのは故手島精一先生の特別なる御教導に因るのでありまして又同先生は修養團の創立にも極めて深き御關係があり更に又同團の結成が當社の創立と年を同じふして居る事などを思ひ合せますと誠に感銘すべき奇縁と云ふ

べく（後略）<sup>17)</sup>

前原の人生航路においての手島の存在の重要性が示されているが、それでは前原の東京高工在学中の手島はどのような方針で同校の教育にあたっていたのだろうか。当時の「学校長報告」において彼は次のように語っている。

（前略）教養ノ方針ニ關シテハ從前ト渝ルコトナシト雖將來更ニ生徒品性ノ修養上ニ重キヲ置カントシ其一法トシテ生徒ヲシテ自重自助ノ思想ヲ發達セシメントス由來我工業界ハ社會上ノ聲譽揚ラサルモノアリ隨テ其道德ノ如キモ衰退シテ自重ノ精神ニ乏シク進歩ノ氣力ヲ缺キタルノ嫌ナキニ非ラス故ニ今日ニ在リテモ尚一般ニ不規律、不整頓、不誠實等ノ弊風ヲ存シ職業ヲ重視セサル義務ヲ嚴守セサル團體ノ利害ヲ顧ミサル自己ノ品位ヲ修養セサル等ノ缺點ハ到ル所之レアラサルハナキニ似タリ是豈我工業界ノ一大瑕瑾ナラスヤ<sup>18)</sup>

よって、「從來學生ヲシテ知識技能ヲ練磨セシムルト同時ニ其徳器品性ヲ修養セシムル」<sup>19)</sup>と、「徳器品性」の「修養」にも意を注いでいることを述べているのである。

また、この点との関連で同校における授業科目としての「倫理」の新設については次のように説明をしている。

（前略）倫理ヲ新設シタルハ技術者トシテ多數工人ノ上ニ立テ之ヲ指導スルニ於テ其言行ハ他ノ好模範タラサルヘカラス故ニ在學中徳器及品性ノ修養ニカヲ効サントスルニ在リ<sup>20)</sup>

こうして同校において初めて「倫理」を担当することになったのは前原と同じ群馬県出身で中学校の先輩にもあたる非常勤講師中島徳藏であるが、この中島が前原準一郎に対する大きな影響を与えるもう一人の人物となるのである。

中島も手島と同じく明治末年には修養團の賛助員に名を連ねている人物であるが<sup>21)</sup>、先にふれた自分の人生において感謝すべきことの一つ

として前原は次のように語っている。

私が同校に入學の年から學校規則が改められ程度が高まり、且倫理學の講義も初めて開かれて本縣出身の倫理學者故中島徳藏先生の教を受けましたこと<sup>22)</sup>。

中島との関係も単なる講師と一受講生の関係を超えていたことが次の記述から理解できる。

當時の校紀は他の學校に比し極めて嚴格なるに不満を感じましたが、不圖した機會に「石の顔」なる小説を読み、深く悟る所があつて處生に關する信念を得ましたので、之を故中島先生に披瀝しましたところ、大いに賛同推奨せられたるため、爾後愈々意を固くしたること<sup>23)</sup>。

前節でとりあげた前原の問題提起の背景には、東京高工におけるこうした二人の師との出会いとその影響があったと捉えることができるだろう。

#### IV. 会社の経営方針と社内教育

東京高工において手島精一、中島徳藏という二人の師から大きな影響を受けた前原準一郎は、次のようなかたちで企業経営にあたっていくことになる。

私は東京高等工業學校在學中不圖したことから、人生についての疑念を抱き種々考慮を重ねました結果、今日の所謂「職分奉公」の責務を自覺したのであります。後年地方の産業に貢獻せんことを念願して、合資會社桐生製作所を創立し、なほ之を繼承したる桐生機械株式會社の經營を畢生の事業として(後略)<sup>24)</sup>

合資會社桐生製作所は、桐生地方に明治30年頃から需要が出てきた織物の準備機・整理機、金箆の供給のために、明治39年に資本金10,000円で設立された会社である。出資者と出

資額は、無限責任社員として前原準一郎5,000円および前原悠一郎500円、有限責任社員として森宗作2,500円、書上文左衛門(祐介)1,000円、大澤福太郎1,000円である。森、書上、大澤という桐生の3人の最有力者<sup>25)</sup>の後援を得てまだ20代の前原準一郎が代表社員となり、それを30代の従兄である前原悠一郎が助けるかたちをとっている。以後、明治43年15,000円、明治44年20,000円、大正2年50,000円、大正6年に桐生機械株式会社設立(桐生製作所を合併し資本金100,000円)、大正7年350,000円と極めて順調に増資が続くことになる<sup>26)</sup>。

同社の経営方針として前原準一郎が重視したのは、「如何なる場合でも信用は最も重んずべき」<sup>27)</sup>であるという考え方にに基づき、「小規模ではありましたが、ただ眞面目な機械を製作することに専念して居りました」<sup>28)</sup>というものであった。

當時の桐生の地方雑誌上では同地方の織物産業における過去からの負の遺産である「粗製濫造」「不正品」問題が折にふれてとりあげられていたが<sup>29)</sup>、前原のこうした経営方針は、在学中から企業経営者の道徳を重んじてそのことを敢えて雑誌上でも主張していた彼にとっては従来の主張の実践ということであったといえるのであろうが、彼が特にこの点に意を注いだことの背景には、第一次世界大戦中の好景気下の大正6年に桐生機械株式会社が設立されたときに「機械は其存續期間長きを以て製造者の責任の重大なることを感ぜざるを得ず」<sup>30)</sup>と述べていたような認識もあったのである。そうした彼にとっては、その半年前にも報じられていた「少々位ごまかしても儲かる丈儲けて置くのは實に今が千歳一遇なのだ」<sup>31)</sup>といった粗製濫造・不正品売り込みを肯定するような状況は、在学中の論説にあった企業経営者の「不道不義」として強く否定すべきものであった。

こうした経営方針は当然従業員に対する社内教育のあり方にも反映されることになるが、社内教育への自らの関わり方について前原は次のような考え方をしていた。

學校卒業後の職業については教職に就くも

のも多かりしに拘らず、私は工場で働く技術者も亦工場員を訓育錬成すべき広い意味の教育者であると考へて、自ら垂範指導するの要あることを卒業の直前に氣付きました(後略)

<sup>32)</sup>

このように語る前原は、前述のように桐生製作所設立前には県立桐生織物学校の教員をしていた期間もあるが、会社設立以来の社内教育の方針を次のように回想している。

(前略) 創立當初の如きは、教室等の設備はななくとも作業場即ち道場、作業即ち教化訓練といつた觀念を以て仕事を通して生活に徹し専ら人を造ること立派な日本人たらしめることを主眼とし、従つて體位の向上、健康の増進、疲勞の防止のための設備には特別の注意を拂つて、渝ることなき努力を盡して來た積りである<sup>33)</sup>。

また大正6年の桐生機械株式会社設立当時には、次のように語っている。

(前略) 機械製造業、我國に起りしは日尚ほ淺きを以て職工拂底にして勢ひ統御に困難なき能はず、加ふるに従業者個々の頭腦を費すこと多き事業なるを以て職工訓練は最も必要なりとす、由て不肖は成るべく職工に接近して、専門的知識の指導誘掖に努め傍ら品性の向上を計らんとし自らも素行を慎みつゝある(後略)<sup>34)</sup>

かつて東京高工在学中に「意志の修養」を主張していた前原が経営者として「品性の向上」ということを重視する桐生機械株式会社においては、のちの大正末期から修養団活動が活発に展開されることになる。「人格の向上」を目的の一つとする修養団は明治末年の時点で手島、中島という前原の二人の師がいずれもその賛助員となっていた団体であるが、先にふれたように手島も修養団創設以前から「学校長報告」において工業界の改善のために徳器品性・品位の修養ということを強調していたのである<sup>35)</sup>。

## V. 桐生高等工業学校との連携と修養団活動

桐生機械株式会社における修養団活動を検討するとき、当時の桐生における唯一の高等教育機関としての桐生高等工業学校との関係に目を向ける必要がある。

大正5年に桐生高等染織学校(以下「桐生高染」と略記。同校は大正9年に桐生高等工業学校と改称している。以下「桐生高工」と略記)として開校した同校と前原準一郎および桐生機械との間には強い連携関係が結ばれることになるが、前原の東京高工3年次に兼任講師として力織機の講義を担当し、前原が「卒業後も何かと先生のお世話になり、色々とお世話を受けていた」<sup>36)</sup>と語る大竹多氣が桐生高染初代校長として赴任してきたこともその一つの要因となっている。

大竹は大正5年4月の桐生高染の第1回入学宣誓式で新入生達に「當地には随分青年を墮落せしむべき誘惑物が少なからぬやう認めらるゝ」と注意を促しながら、次のような5か条の同校の教育綱領を掲げていた<sup>37)</sup>。

1. 教育に關する勅語並に戊申詔書の聖旨を奉體すべし。
2. 校規を守り師長を敬ひ學友を親愛すべし。
3. 學業を勵み品行を慎み志操を高尙にすべし。
4. 身体を強壯にし精神を快活にし意思を鞏固にすべし。
5. 言責を重んじ廉耻を知り勇氣を練るべし。

人格と道義を重んじた人物である大竹は、こうした教育綱領のもと桐生高染を全寮制として、徳育を重視する厳しい教育を開始したのである<sup>38)</sup>。

ところで、桐生高染開校直後の大正5年6月、同校教授として桐生に着任する飯野知次が大正2年からの欧州留学より帰国しているが、前原準一郎は、桐生町の最有力者森宗作の子息である森平三郎、前原悠一郎とともに横浜まで出迎えに赴いている<sup>39)</sup>。また前原準一郎は同校初代紡織科長関盛治とも関の桐生赴任前から交際

があり、前原の大竹への依頼により関は前述の「三企業」の技術顧問になっている<sup>40)</sup> ことにも注目したい。桐生高染への大きな期待がこうした桐生側の対応に示されているとともに、前原準一郎はそうした桐生側と学校とのつながりの中で重要な位置にいた人物であることを示す逸話であるといえるだろう。

このような関係にあった桐生高工と前原の間にもう一つ新たな関係が結ばれることになる。大正10年に夜間2年制の桐生高工附属工業補習学校（大正12年に附属商工補習学校、大正15年に附属商工専修学校と改称し昭和20年まで存続）が開校すると、前原準一郎は金子竹太郎、前原悠一郎を含む他の4名とともに同校の「実業常識」という授業の担当者となり<sup>41)</sup>、大正13年に同校に評議委員会が設立されるとその委員にも任命されている<sup>42)</sup>。

こうした立場になった前原は同校を積極的に活用することになる。桐生機械株式会社では同社工員16名を附属工業補習学校第一期生として授業料会社負担で入学させたのであり<sup>43)</sup>、うち9名が順調に2年後に卒業している<sup>44)</sup>。その際の桐生機械の対応について前原は次のように語っている。

（前略）市内工場の公休日は、大正九年十一月から第一第三の日曜となったが、月二回の休みでは難しい宿題などの勉強が困難であると言うので公休日を毎日曜に改め、その分だけ全員の給料を増額した（後略）<sup>45)</sup>

附属工業補習学校を活用するために、桐生機械は桐生地方の経営者たちに大きな波紋を投げかけるような特別な対応をしたとすることができるであろうが、同時にこの卒業生従業員には腕時計を贈るなどして奨学に努めたのである<sup>46)</sup>。

こうした状況にあった大正15年1月、桐生高工では修養団の支部を設置し、当時の第二代校長西田博太郎が率先垂範して活発な活動を展開することになるが、桐生機械株式会社でも大正末期から修養団活動が活発に展開され、昭和2年1月に全員入団、同年の天長節に修養団桐

生機械支部を設置している<sup>47)</sup>。昭和2年6月18日、19日の桐生高工における修養団講習会は、主催者である前原準一郎の相談を受けて同校で開催されているが、18日の講習会には桐生市内各方面の有力者を含め足利、伊勢崎からの参加者等250名、翌日には市内早起会会員二百数十人等の外部からの参加を含め総勢500名以上が参加している<sup>48)</sup>。前原がこうした大規模の講習会的主催者であったことに注目したい。また、昭和2年11月12日、13日に桐生高工で開催された一夜講習会には桐生機械株式会社の全団員が参加している<sup>49)</sup> ことなどにみられるように、修養団活動における同社と桐生高工との連携関係が指摘できる。そして、当時の修養団運動は「近頃では事実上毛の野を風靡すと云ふ様な状態」<sup>50)</sup> となっており、昭和3年には修養団桐生支部講演会として修養団創設者の蓮沼門三本人の講演会が報じられることにもなるのである<sup>51)</sup>。

当時の桐生機械の修養団活動について前原は次のように語っている。

（前略）大正の終り頃から従業員の中に熱烈な修養團運動が燃え上り、昭和二年の天長節に團長平沼男爵の代理として二木博士の臨席あり、當社支部の結盟式を挙げたのであります。此の運動こそ眞に下から盛り上つた力でありまして、其後數年間當社に於ける此の運動の盛であつた時代には社内の気分も別して明朗でありました<sup>52)</sup>。

また、この支部発足以降の活動状況について、同社の社史には以下のような記述がみられる。

以後全社的に熱烈な活動を展開、桐生の街中にも広く知れ渡り、共鳴者も多数現われた。そして各所で随時行われた講習会などには積極的に多数参加受講し、修養団精神の「総親和・総努力」の実現に努めた結果、社内は一段と明るく社員相互の信頼性を増し、結束が高まり、作業能率が向上したため、当時の深刻な不況にもかかわらず、さしたる影響を受けることなく切り抜けることができた<sup>53)</sup>。

昭和2年3月の金融恐慌以降の不況下の同社の状況はこのように示されているのである。

## VI. 前原準一郎の修養主義

経営する桐生機械株式会社で修養団活動を活発に展開することになる前原準一郎の修養主義の特徴を、彼の桐生における位置づけとの関連で検討してみたい。

まず先述のように企業経営者としての前原は、工場で働く技術者は工場員に対する教育者でもあるという認識をもって経営を始めたということに注目する必要がある。その際に専門知識の指導のみならず自身も含めての品性の向上ということにも意を注いでいたのであった。

ところで、こうした前原はまだ若い頃からその行動・人格に対する高い評価を得ていたことに注目したい。大正4年5月発行の『桐生大観』において、著者の坂梨春水は30代半ばの前原について次のように紹介している。

君は歐洲文明を渾然と消化せる英國人式紳士の典型にして居常飽く迄も正確勉勵、廉潔、謙讓を守りて苟もせず、眞に桐生中心人物中の一異彩たるを失はず<sup>54)</sup>

「桐生中心人物」という表現には東京高工を卒業した桐生製作所経営者であるということが反映していると考えられるが、そもそもかつての桐生織物学校の教員について同校卒業生の一人が、金子竹太郎、前原悠一郎、前原準一郎、岩下龍太郎といった当時の同校教員はいずれも桐生町の「名門の出」<sup>55)</sup>と述べているように、前原準一郎の学歴、会社設立の背景にそうした出身階層の影響を無視することはできないだろう。彼がそういう背景を持つ人物として郷里桐生で活動していることに注目する必要がある。

ところで、同じく大正4年の『書上タイムス』9月号でも坂梨春水は前原について次のように紹介している<sup>56)</sup>。

吾輩は最初會見した刹那に此の仁は温厚な

柔和な而も確乎不拔の信念を藏めて常に理想の實現に努め、意志の鞏固な桐生當代稀れに見る英國式ゼントルマンの典型であると思つた、其の後君と親しく交際するにつけ、君の云ふ處、君の行ふ處恰も符節を合するが如く所謂英國流の紳士の型に當嵌つてゐる處を見れば第一印象我れを欺かざるものであつた(中略)ゼントルマンとはハイカラなきぎな氣取屋を云ふのでは無く義務と公德との觀念に住し一言一行をも苟もせざる二十世紀の文明を通したる君子を指すのである、約言すれば善良なる市民である<sup>57)</sup>。

このように前原を「義務と公德」を重視する人物であると紹介したうえで、坂梨は「學歴といひ經驗といひ人格といひ理想と云ひ申分が無い」<sup>58)</sup>という評価で締めくくっているのである。

桐生機械株式会社が創設された大正6年にも前原についての複数の人物評が出ている。まず、『書上タイムス』大正6年6月号では「赤尾生」という著者が桐生機械について次のように紹介している。

其特色は外觀の雄と内容の充實を誇るにあらずして高潔なる前原社長の人格と堅實なる營業振とで内地には類の尠なき織物の機械を製造して斯業の發達に貢獻して居る一事である<sup>59)</sup>。

そして同社の發展を「十年一日の如く信用と誠實を生命とした社長の營業方針の賜」としたうえで、「氏の人格の崇高にして舉止の謹直なる言語の幽婉にして風采清高なる如きは凡て初對面の人に深き印象を與ふべき特徴である」という評価を加えているのである<sup>60)</sup>。

同じ大正6年に発行された『兩毛機業大観』では、岡田重五郎が次のように前原を評している。

氏や爲人、謹直端嚴、温良恭讓、模範的好紳士なり、而して職を執るや精勵にして嚴格、殊に時間尊重の勵行には身を以て範を示し、誤ることなしと言ふ。

桐生機械が異常なる発展は、氏の人格が製作の上に反映し、精確にして堅牢、巧妙にして自在なるを以て、各地得意の信用と推賛を博したるによらずんばならず<sup>61)</sup>。

以上のように当時 30 代の前原は既にその人格の高さを評価され、それが桐生機械の発展と結び付けて認識されるような状況にあったのである。前原は「人格の向上」に向けて自ら修養するとともに社員に対する教育でもその点を重視し、それを会社の発展に結びつけてみせた人物であったと言って間違いはないだろう。

ここで桐生機械株式会社が設立された大正 6 年当時の桐生町民の経済力からみた階層構造を見ておこう。大正 6 年の桐生町の戸数は 5,901 であるが、各戸の経済力による税金額の戸数割等級表に「最 1 等」から最下位の「50 等」までと「免除者」の戸数を見ることができる<sup>62)</sup>。それによれば、「最 1 等」は町税年額 944.08 円で 1 戸(森宗作)、「甲 1 等」は 539.48 円で 1 戸(書上文左衛門)、「2 等」は 402.34 円で 1 戸(大澤福太郎)といわゆる「三巨頭」が最上位の 3 戸である一方、最下位の「50 等」は 1.79 円で 2,632 戸となっている。この階層構造の中で前原準一郎は「22 等」で町税額 43.57 円となっているが、「22 等」までの戸数の合計は 119 であり、総戸数 5,901 のほぼ上位 2% に入っていたことになる<sup>63)</sup>。

当時の前原準一郎は経営する会社の極めて順調な発展により桐生における経済的上層の地位にあったのである。そのことは地域の有力者の団体である「桐生懇和会」が大正 7 年に「桐生倶楽部」に発展的に改組された際に、理事長金子竹太郎、副理事長前原悠一郎のもと、その他の 13 名の理事の一人として前原準一郎も選任されている<sup>64)</sup> ことに端的に示されているといえるだろう。

このように東京高工在学中から経営者の道徳に関心を持ち、会社経営の初期から「品性の向上」を目指していた前原は、自らも人格の高さで評価され、そのことによる会社の発展さらには桐生における地位の確立という道を辿ったわけである。

ところで、前原の人物評をみるときにもう一つ注目しなければならないのは、彼が合理主義的実用主義とでも呼べるような思考をする人物であるということである<sup>65)</sup>。例えば坂梨は、前原がローマ字普及に熱心であることおよび自らタイプライターによるローマ字書きのはがきを受け取ったことを紹介しながら、前原の「羅馬字國語論に至つては君の全人格其の儘の様に感ぜられる」<sup>66)</sup> と述べているが、前原がローマ字使用を持論とする理由を語る様子を次のように描写している。

劃の多い難解の日本在來の文字は文學的には價值があるかも知れないが實用の点に於ては殆んどゼロである、之れからの日本は怎うしても世界的國語たるローマ字を使用せなくてはならぬ、尠くとも私の子供の時代には六ヶ敷い手敷のかゝる在來の國字は一字も習はせない所存ですと會ふ度に(中略)靜かに物語られる<sup>67)</sup>

「日本在來の文字は文學的には價值があるかも知れないが實用の点に於ては殆んどゼロである」という前原の考え方は極めて単純明快な実用主義的なものである。筆者は先に修養主義的教育を展開する実業専門学校である桐生高工の卒業生と、教養主義が主流文化となって以降の高等学校の卒業生との間の「語学教育論争」をとりあげ、前者が語学について徹底的に「実用性」を重視していることに注目したが<sup>68)</sup>、のちに修養団の功労者と位置づけられることになる手島精一の大きな影響を受けながら東京高工で学んだ前原も同様な言語観を持っていたことに注目したい。

坂梨はローマ字問題以外にも、桐生製作所における電話の対応の仕方、前原が他人を訪問した時のあいさつの仕方を紹介しながら、時間経済の観念から先方の労力と時間を省くための前原らしい行動であることにも言及しているし、前原が欧米視察の際に体験したドイツでの左側通行、自転車の左右折の際の合図といった慣行を桐生に広めようと率先していることなどにもふれている。このように前原は、生活の合理的



改善への試みを個人・会社内にとどめることなく地域社会全体への普及を視野に入れながら行動する人物であった。時間や場所についての約束・規律を守る習慣を養うべきであるということは東京高工在学中から主張していた問題であり、その後の前原はこうした点の改善に向けて自ら積極的に行動していたのである。

このような前原の活動の中には、友人である成蹊学園創設者中村春二が発行する雑誌『新教育』を桐生町内に普及する努力や、桐生の小学校教育改善を目的として、有志と小学校教師の懇談会を斡旋するといったことも含まれていた<sup>69)</sup>。

このように「教育者」としての自覚を持ち会社経営を始めた前原は桐生地方全体の生活の改善をも視野に入れた活動を展開する人物であり、修養団活動もそうした活動の一環であったと捉えることができるだろう。

伊津野は新渡戸稲造の修養論をとりあげて、「毎日の具体的な行動を通して心を生き生きとたもち、自己の向上あるいは生活の向上をはかっていくという教育論であり、それは一種のプラグマティズムであるともいえる」と述べているが<sup>70)</sup>、上述の中村春二の教育論もそれと共通する実践主義であったと捉えられている<sup>71)</sup>。前原準一郎が中村の雑誌を広めようと努力したことは、彼の奉ずる修養主義が中村同様の実践主義的なものであったということを示唆していると考えられる。

ところで、前原のこうした諸事改善にむけての実践活動は、当時の桐生という地域社会ではやや急進的過ぎる面を含むものでもあったようである。いとこの前原悠一郎はのちに前原準一郎を評して次のように語っている。

兎に角總てのものに新らしい考へを持つてをられ、總ての行ひに於ても進取的のやり方でありました。世間から掛け離れた考へを持たれてゐたために、時々誤解をうける様な場合もなきにしもあらずでありました<sup>72)</sup>。

附属工業補習学校を活用するために桐生地方の慣行に反するかたちで桐生機械の公休日を増

やして給料を上げたという思い切った行動などもあらためて想起されるし、坂梨の最初の人物評にあった「眞に桐生中心人物中の一異彩」という表現も暗にそうした点を示唆しているとも考えることができる<sup>73)</sup>。

さて、前原準一郎が卒業した東京高工では、彼が卒業したのちも長く校長を務め続けていた手島精一が修養団創設者蓮沼門三を同校の通俗講話会に招いたことをきっかけとして明治42年6月に修養団支部の設立に至る<sup>74)</sup>。そして先述のように桐生高工も大正15年には修養団支部を設立したが、前原準一郎はその両校を結び付けるうえで重要な位置にいた人物であった。東京高工在学中から桐生の道德問題を深く憂慮してその改善のあり方を模索し、桐生における会社経営のなかでそれを自ら実践していくことを通して桐生における指導的地位に立った前原準一郎は、桐生高工と連携しながら同地の修養主義運動においても一つの中心的な役割を担う人物となった。

修養団の創設者蓮沼門三については修養の「方向づけ」の弱さということが指摘されている<sup>75)</sup>が、前原準一郎の抱く修養主義は、粗製濫造・不正品売り込みといった問題や多数の職工を抱えて風儀の問題を指摘され続けてきた桐生地方における企業経営者として、そうした問題の改善さらには合理的な生活改善を求めるプラグマティックなものであり、それは当時の桐生地方ではやや急進的過ぎる面を含むものではあったが、彼はそうした修養主義の有効な側面を体現した人物であったとすることができるだろう。

## 【注および参考文献】

- 1) 修養団運動八十年史編纂委員会編『修養団運動八十年史 資料編』(財)修養団 昭和60年 165頁。
- 2) 『桐生市史 中巻』に「実に本社(桐生機械株式会社:引用者)は桐生の近代的産業の発達史上に日本絹撚株式会社(模範工場桐生撚糸合資会社として設立:引用者)・両毛整織株式会社(両毛整織株式合資会社として設立:引用者)とともに永久にその光彩を放つものである」という記述が

ある。桐生市史編纂委員会編『桐生市史 中巻』昭和34年608頁。日本絹襪株式会社と両毛整織株式会社の実質的な経営者は前者が前原悠一郎、後者が金子竹太郎であり、2人の経歴は以下のとおりである。

前原悠一郎は明治6年に桐生新町に生まれ、明治30年東京工業学校染織工科を卒業し、帰郷して織物製造業自営後明治32年桐生織物学校の教員となり、明治35年に模範工場桐生撚糸合資会社代表社員になる。前原準一郎とは隣家で育つたいとこ同士である。

金子竹太郎は明治7年桐生新町に生まれ、明治26年東京工業学校染織工科卒業後、明治29年桐生織物学校主席訓導(のち教頭)になり、明治40年に両毛整織株式会社代表社員になる。

つまり、前原準一郎を含めた3人はいずれも桐生の出身で東京高等工業学校(前身は東京工業学校)の同窓生でもあり、企業の経営にあたる前に桐生織物学校の教員を務めるという経歴も共通していた。

- 3) 修養団運動八十年史編纂委員会編『修養団運動八十年史 概史』(財)修養団 昭和60年37頁。
- 4) 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店1995年18頁。
- 5) 本論文で検討するのは修養主義が「錬成」概念に押し込まれる前まで、具体的にはいわゆる十五年戦争が始まる昭和初期までの時期を対象とする。筒井は戦後の修養主義については次のように述べている。「戦後の復興期・高度成長期のエートスとなり、やがては昭和四〇年代以降衰退に向かう」。同上書35頁。
- 6) 当時の前原の年齢(22歳)に注目したい。
- 7) 『桐生之工業』第38号(明治34年11月5日発行)22頁。
- 8) 同上。
- 9) 同上誌23頁。
- 10) 同上。
- 11) 同上誌23-24頁。
- 12) 同上誌24頁。
- 13) 『桐生之工業』第33号(明治34年6月5日発行)7-8頁。
- 14) 『書上タイムス』第7巻第6号(大正6年6月5日発行)33頁。
- 15) 前掲『修養団運動八十年史 資料編』78頁。手島は明治末年の修養団賛助員にも名前を連ねている。前掲『修養団運動八十年史 概史』62-63頁。
- 16) 前原準一郎『桐生機械株式会社経営の回顧と感謝』昭和17年47頁。なお、この資料を以下の部分でも何度か引用することになるが、昭和17年の刊行であることには注意を要する。
- 17) 同上書60頁。
- 18) 『東京工業学校一覽 從明治三十二年 至明治三十四年』(明治33年12月25日発行)99頁。
- 19) 同上書100頁。
- 20) 同上書97頁。
- 21) 前掲『修養団運動八十年史 概史』62-63頁。当時の中島の肩書は東洋大学評議員である。
- 22) 前掲『桐生機械株式会社経営の回顧と感謝』47頁。
- 23) 同上書47-48頁。
- 24) 同上書2頁。前述のように昭和17年出版のこの資料中の「職分奉公」という用語には、「今日の所謂」ということばが付されているように、解釈にあたっては用語法のみならず思想面においても時代的バイアスがかかっている可能性を考慮する必要がある。
- 25) 前原悠一郎はこの3人の最有力者を「三巨頭」と呼び、桐生製作所創立当時を次のように回想している。「(前略)この三人が桐生を牛耳つてをりました。桐生の仕事は、政治産業方面に於てもこの三巨頭の合議によつて殆ど決せられました」。桐生機械株式会社『前社長前原準一郎氏新社長石井太吉氏 送迎記念録』昭和16年15頁。この資料も昭和16年の刊行であり、解釈にあたっての注意が必要である。
- 26) 以上、桐生製作所の設立の経緯およびその後の発展については、前掲『桐生機械株式会社経営の回顧と感謝』5-6頁。
- 27) 同上書39頁。
- 28) 同上書49頁。
- 29) 例えば『書上タイムス』誌上では、こうした問題を扱った記事を容易に見出すことができる。桐生織物業者間の弊風とその改善の試みについては桐生織物史編纂會編『桐生織物史 下巻』昭和15年509-520頁。なお、松村は明治期の桐生における織元と賃織業者の間の不正問題について、『桐生之工業』およびその後身誌『織物工業』の記事を利用して分析している。松村敏「明治期・桐生織物業における織元-賃織関係の一考察-賃織業者の「不正」問題から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第95集2002年3月207-227頁。
- 30) 『書上タイムス』第7巻第7号(大正6年7月5日発行)42頁。
- 31) 『書上タイムス』第7巻第1号(大正6年1月1

- 日発行) 19 頁.
- 32) 前掲『桐生機械株式會社經營の回顧と感謝』48 頁. 「訓育鍊成」のことばについては時代のバイアスに注意する必要がある.
- 33) 前掲『前社長前原準一郎氏 新社長石井太吉氏 送迎記念録』39 頁. 「教化訓練」についても時代のバイアスに注意する必要がある.
- 34) 『書上タイムス』第 7 卷第 7 号 (大正 6 年 7 月 5 日発行) 42-43 頁.
- 35) 修養団が創設された当時刊行された修養書においては, 「人格」とともに「品性」ということばも多く使用されていた. 前掲『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』41 頁.
- 36) 前原準一郎「開校前後のことども」岩本健二編『群馬大学工学部 50 年史』群馬大学工学部創立五十周年記念会 昭和 40 年 332 頁.
- 37) 『書上タイムス』第 6 卷第 5 号 (大正 5 年 5 月 5 日発行) 37-38 頁.
- 38) 大竹多氣「士魂工才」『書上タイムス』第 6 卷第 9 号 (大正 5 年 9 月 5 日発行) 2-3 頁. 群馬大学工学部 75 年史編纂委員会編『群馬大学工学部 75 年史』群馬大学工学部 平成 2 年 11-13 頁, 725 頁.
- 39) 『上毛新聞』大正 5 年 6 月 18 日. 飯野は前原準一郎にとっては東京高工の先輩 (前身の東京工業学校時代の卒業生) であり森は後輩にあたる. なお, 森は大正 15 年に桐生高工教授に就任している.
- 40) 前掲『群馬大学工学部 50 年史』332 頁.
- 41) 『桐生高等工業學校附屬商工補習學校一覽』(発行年不明. 但し, 同書に掲載された生徒数などの統計は大正 12 年 6 月 1 日調となっているので, 同年の発行と判断される) 30 頁.
- 42) 各年『桐生高等工業學校一覽』.
- 43) 桐生機械社史編集委員会編『桐生機械社史』桐生機械株式会社 昭和 56 年 271 頁.
- 44) 前掲『桐生高等工業學校附屬商工補習學校一覽』46-51 頁.
- 45) 前掲『群馬大学工学部 50 年史』333 頁.
- 46) 前掲『前社長前原準一郎氏 新社長石井太吉氏 送迎記念録』19 頁.
- 47) 前掲『桐生機械社史』45 頁.
- 48) 『桐生高工時報』第 20 号 (昭和 2 年 7 月 10 日発行) 13 頁.
- 49) 『桐生高工時報』第 25 号 (昭和 2 年 12 月 10 日発行) 2 頁. この資料では, こうした桐生高工の修養団活動に附属商工専修学校の生徒たちも参加していることが報じられている.
- 50) 同上.
- 51) 『上毛新聞』昭和 3 年 12 月 2 日. なお, 「三企業」のうち, 金子竹太郎經營の両毛整織株式会社でも修養団支部が, 前原悠一郎經營の日本絹拵株式会社では「修養会」が組織されている. 前掲『修養団運動八十年史 資料編』94 頁, 日本絹拵株式会社創立四十年史編纂會編『日本絹拵株式會社創立四十年史』日本絹拵株式會社 昭和 18 年 169-170 頁.
- 52) 前掲『桐生機械株式會社經營の回顧と感謝』34 頁. 下線は原著者である前原による.
- 53) 前掲『桐生機械社史』45 頁.
- 54) 坂梨春水『桐生大觀』大正 4 年 61 頁.
- 55) 田島生成「織物学校の思い出」群馬県立桐生工業高等学校五十年史編纂委員会編『桐工五十年史 上巻』群馬県立桐生工業高等学校 昭和 59 年 91 頁. この思い出は昭和 15 年に執筆されたものである.
- 56) この記事は「S 生」の署名で執筆されているが, 『書上タイムス』誌での一連の記事の執筆状況や内容から判断して, この記事の著者は坂梨として間違いないと考える.
- 57) 『書上タイムス』第 5 卷第 9 号 (大正 4 年 9 月 5 日発行) 34 頁. 圏点は原文のまま.
- 58) 同上誌 36 頁. 当時の桐生における高学歴者の位置づけは, 「大正の初め頃には桐生に病院がなく, たつた一人の醫學士を神様の如く思つてをつた」という言葉に端的に示されている. 西原嘉一「送迎の辭」前掲『前社長前原準一郎氏 新社長石井太吉氏 送迎記念録』19 頁. 高等工業学校卒の学歴は大学卒業の学士より一段低く, また大正 5 年の桐生高染の開校により学士を含む高学歴者が教員として赴任することになるとはいえ, 高等工業学校卒業という学歴は当時の桐生においては極めて高いものであった. ちなみに前原が高等小学校を卒業した明治 27 年には群馬県内では中学校は前橋にしかなかったが, 同年に桐生からそこへ入学したのは彼の他 1 名のみであった. 前掲『群馬大学工学部 50 年史』329 頁.
- 59) 『書上タイムス』第 7 卷第 6 号 (大正 6 年 6 月 5 日発行) 30 頁. 著者の「赤尾生」は当時の桐生の地方雑誌に精力的に執筆していた赤尾卯三郎と推察される.
- 60) この 2 か所の引用は同上誌 32 頁.
- 61) 岡田重五郎『両毛機業大觀』大正 6 年 165 頁.
- 62) 桐生町役場『大正六年度戸數割等級表』.
- 63) ちなみに明治 43 年時点での前原の等級は「25 等」

で、総戸数 4,639 戸のうち上位累計 182 戸（ほぼ上位 4%）に位置していた。桐生町役場『明治四拾参年度戸数等級表』。

- 64) 桐生倶楽部五十年史編集委員会編『桐生倶楽部五十年史』（社）桐生倶楽部 昭和 43 年 45 頁。
- 65) 前原の考え方を「無駄を省き物事を能率的に進めるという合理主義の考え方」と紹介している資料がある。「明日へ伝えたい 桐生の人と心」編集委員会編『明日へ伝えたい 桐生の人と心 下巻』桐生市教育委員会 平成 16 年 144 頁。
- 66) 『書上タイムス』第 5 巻第 9 号（大正 4 年 9 月 5 日発行）35 頁。
- 67) 同上。
- 68) 拙稿「昭和初期の桐生高等工業学校の学校文化に関する一考察 —同窓会機関紙上の語学教育論争分析の試み—」『仙台大学紀要』第 40 巻第 1 号 2008 年。
- 69) 以上の前原の諸活動については、『書上タイムス』第 5 巻第 9 号（大正 4 年 9 月 5 日発行）35-36 頁。  
中村春二の『新教育』は大正 4 年 4 月の創刊であるが、この記事では前原が既に桐生町内で 40 名ほどの読者を確保したことが紹介されている。中村との関係を前原は次のように語っている。「（前略）親友故中村春二氏（中略）などの感化を受け青少年の教育については深い（中略）の關心を持つて居ります」。前掲『桐生機械株式會社經營の回顧と感謝』41-42 頁。  
前原と中村は若い頃からの友人であり、前原

が中学 3 年の時に第一高等学校 1 年の中村およびその知人遺澤恒猪とともに 1 週間ほど赤城山等を巡る旅行を行なっている。遺澤恒猪「故中村先生に就て」『桃源』第 4 号（大正 15 年 2 月発行）。

- 70) 伊津野朋弘『大正デモクラシー下の教育』明治図書 1976 年 152 頁。新渡戸も修養団の賛助員であった。前掲『修養団運動八十年史 概史』62-63 頁。
- 71) 宇野美恵子「伝統的規範意識から近代的責任主体形成への道程 —中村春二の場合—」『教育哲学研究』第 48 号 1983 年 22 頁。
- 72) 前掲『前社長前原準一郎氏 新社長石井太吉氏 送迎記念録』24 頁。
- 73) 大正 14 年に市議会議員となった前原が、時間励行を呼びかけたにも拘らず他議員が一向に時間を厳守しないことに対して議員辞職という行動をとったことにも注目しておきたい。前掲『明日へ伝えたい 桐生の人と心 下巻』148 頁、前掲『群馬大学工学部 50 年史』334 頁。桐生の市制施行は大正 10 年である。
- 74) 前掲『修養団運動八十年史 資料編』88 頁。
- 75) 末本誠「修養論について —蓮沼門三と修養団を中心に—」『社会教育学・図書館学研究』第 2 号 1978 年 61 頁。

（ 2013 年 11 月 29 日受付 ）  
（ 2014 年 1 月 21 日受理 ）